

## 馬の家畜改良増殖目標骨子（案）

## 馬

## 1 改良・増殖をめぐる情勢と課題

馬は、**重種馬、軽種馬等**として、それぞれの用途に応じて利活用が図られているが、**生産者の高齢化が進展し、担い手が不足していることから、飼養戸数や飼養頭数は減少傾向で推移している。また、それに伴い、生産を支える技術者（獣医師、装蹄師等）や指導者等の不足も懸念されている。**

**重種馬**については、**生産者の高齢化等により、生産基盤の弱体化が進展していることから、担い手の確保や効率的な飼養管理に努め、優良な繁殖雌馬を確保し生産基盤を強化することが重要である。また、生産意欲の向上を図るためにも、重種馬のけん引能力等を踏まえた利活用の幅を広げることが求められる。**

**軽種馬**については、**内国産馬の能力が世界トップクラスに比肩するなど、能力の向上が図られているが、利用する血統に偏重が見られることから、能力向上を図りつつ、血統の偏重の改善に配慮した交配に努める必要がある。**

**乗用馬**については、**競技や乗馬クラブ等による従前からの利用に加え、近年ホースセラピー、教育及び観光など多様な利活用が図られているが、更に利活用の幅を広げていくためには、引退競走用馬の再トレーニングによる乗用利用の拡大を図るとともに、小さな子どもでも扱いやすい日本在来馬や小格馬などの活用をはかることにより、馬とふれあう機会の積極的な創出も有効な取組であると考えられる。**

**日本在来馬**については、**その希少性に配慮した品種の保存及び品種による特性を活かした利活用の推進をするため、近交係数の上昇を踏まえた繁殖基盤の維持・確保及び計画的な馬の利活用先の確保など、関係機関による連携の下、地域の実情に踏まえた対応が重要である。**

## 2 改良目標

## (1) 能力に関する改良目標

## ① 重種馬

**強健性の向上を図るとともに、環境適応性が高く、性格が温順で増体性及び飼料利用率の高いものとする。繁殖雌馬にあつては、適正な飼養管理により、流産や分娩事故の低減等を図りつつ、受胎率、生産率、ほ育能力、連産性等の繁殖能力の向上を図るものとする。なお、繁殖の開始にあつては、個別個体の発育状況等に十分配慮するとともに、分娩前後の適切な栄養管理に努めるものとする。**

**このうち、輓用にあつては、運動性に富み、けん引能力の高いものとし、また、肥育用にあつては、早熟で発育が良く、産肉能力の高いものとする。**

表：繁殖能力に関する目標数値（全国平均）

※「繁殖開始年齢2才割合」の目標数値は除外する。

	受胎率	生産率
現在	78%	68%
目標 (令和12年度)	75%以上	65%

注1：受胎率は、当年の受胎頭数を当年種付け頭数で除したもの。

注2：生産率は、当年の産子数を前年の種付け頭数で除したもの。

## ② 軽種馬

国際的に通用する、肉体的かつ精神的に強靱で、スピードと持久力に優れた競走能力の高いものとする。

## ③ 乗用馬

強健性の向上を図るとともに、性格が温順で動きが軽快で乗りやすいものとする。

このうち競技用にあつては、運動性に富み、飛越力、持久力等に優れたものとする。

### (2) 体型に関する改良目標

肢蹄が強く、体各部の均称の良いものとし、それぞれの用途や品種の特性に応じた体型とする。

### (3) 能力向上に資する取組

#### ① 改良手法

##### ア 重種馬

輓用として我が国において広く利用される日本輓系種<sup>(注)</sup>を中心に、種雄馬及び繁殖雌馬の確保に努め、けん引能力等の評価方法の確立及びその実用化に向けた取組を推進するものとする。

また、日本輓系種の改良素材として活用可能なペルシュロン種等の外国品種を含む優良な種雄馬及び繁殖雌馬の維持・確保とその適切な利用に努めるものとする。

さらに、外国産馬も含め優良種雄馬の広域利用、輸入精液の利用を含む家畜人工授精技術や受精卵移植技術の改善とその普及により改良の推進に努めるものとする。

あわせて、家畜改良の基礎となる家畜登録制度への馬の登録を推進することで、血統登録等の頭数を確保し、適切な改良に取り組むものとする。

注：日本輓系種

ブルトン種やペルシュロン種等の輓系馬を掛け合わせて造成された、我が国独自の品種。

#### イ 軽種馬

遺伝的多様性に配慮した育種素材を確保するとともに、血統情報等を活用した交配に努めるものとする。

また、強健性・運動能力等に関するデータの収集等を行い、その活用に努めるものとする。

#### ウ 乗用馬

多様なニーズに対応した乗用馬を生産するため、優良な種雄馬及び繁殖雌馬の確保と用途に応じたその適切な利用に努めるとともに、飛越能力等の評価方法の確立及びその実用化に向けた取組を推進するものとする。

また、外国産馬も含め優良種雄馬の広域利用、輸入精液の利用を含む家畜人工授精技術や受精卵移植技術の改善とその普及により改良の推進に努めるものとする。

日本在来馬については、用途に応じて各品種の特性（性格や体型）をいかした利活用を推進するとともに、希少性に配慮した品種の保存に努めるものとする。

### ② 飼養管理

ア 技術研修会等の開催を通じて、飼養管理の改善、馴致・育成技術等の向上に努めるとともに、繁殖技術の改善・普及に努めるものとする。また、担い手の育成や馬に関する指導者等の確保及び技術向上等に努めるものとする。

イ 我が国の実態を踏まえて作成された公益社団法人日本馬事協会の「アニマルウェルフェアの考え方に対応した馬の飼養管理指針」の周知及びその普及を推進するものとする。

### ③ 衛生管理

家畜疾病の発生予防及びまん延防止のため、適切な予防接種に努めるほか、生産者は飼養衛生管理基準を遵守する取組を推進するものとする。

#### ④ 多様な利活用に関する情報共有

馬の多様な利活用を推進するにあたっては、一世代で多用途に供すること（競走用から乗用や繁殖用などへの用途転換）から、各用途段階の関係者間での意見交換、情報の収集・共有及び実態把握等が重要であり、また、利用目的ごとの需要に即した取組を推進するものとする。

### 3 増殖目標

飼養頭数については、利用目的ごとの需給動向に応じた頭数となるよう努めるものとする。

#### (参考) 馬をめぐる情勢

##### 1 馬をめぐる情勢

我が国における馬の飼養頭数は、戦後減少し続けながらも、各地域、用途ごとの需要に応じて生産されている。近年では下げ止まりの状況が見られるものの、飼養者の高齢化等により将来的には生産基盤の維持が困難になることが懸念される。

##### 2 これまでの改良の取組と成果

###### (1) 改良事業の概要

馬は、古くは農耕、運搬等のための生活に密着した役畜として、また軍用馬として改良が図られてきた。戦後の経済成長を経て、モータリゼーション、農業機械化の進展により、役畜としての用途は薄れ、現在では、それぞれの利用目的に応じた生産、改良が行われている。

重種馬は、種雄馬を中心にばんえい競馬の成績による選抜及びペルシュロン種等の外国品種も含めた交配による雑種強勢を利用して、けん引能力の向上を期待した大型で早熟、強健性を目指した改良が進められている。

軽種馬は、海外からの優良種馬の導入及び国内の好成績馬を用いた次世代生産が行われ、競馬の国際化も進展する中、競走能力の向上を目指した改良が行われてきた。

また、乗用馬は、乗馬人口の増加が推計される中、国内外の優良種雄馬を活用した内国産乗用馬の生産・改良が行われており、特に競技馬の飛越力、持久力の向上が図られている。

## (2) 成果

重種馬は、けん引能力等の向上を目指し、体長や体幅の増加による大型化が図られてきた。繁殖開始年齢は、かつて4才から5才であったものが2才から3才が主流となるなど、早熟化がみられている。

軽種馬は「ロンジン・ワールド・ベスト・レースホース・ランキング<sup>(注)</sup>」に、平成30年度は日本で調教された馬が32頭入り、世界全体の1割を占めるなどの実績を示している。

乗用馬では、近年、国内において、コネマラ種<sup>(注)</sup>の凍結精液を用い、北海道和種馬をドナーとして人工授精により受精卵を作成し、他の雌馬に受精卵移植を実施し、24年ぶりに受精卵移植による産子が誕生するなど、新たな取組が行なわれており、優良な馬を効率的に生産するための技術として注目されている。

注：ロンジン・ワールド・ベスト・レースホース・ランキング

IFHA（国際競馬統括機関連盟 [本部：パリ]）は、世界的な主要なレースでの成績に基づき、競走用馬の評価を実施。その結果をランキング化して公表したものの。

注：コネマラ種

アイルランド原産の小格馬。気性の激しいサラブレッドと異なり、おとなしく小型なため、障がい者乗馬や高齢者・子ども向けの乗馬として利用が期待されている。